

## ●報告 第2回 平林浩さんとたのしく考える仮説実験授業の形成 仮説実験授業研究会も仮説実験的につくられたんですか？

多久和俊明・渡辺規夫・岩本美枝・加藤浩幸

3月21日に、「緊急事態宣言」で延期にしていた、上の研究会をオンラインで実施することができました。参加者は20人ほど。内容は①「教育を根本的に改革するためにあらゆることを組織化する」、②「授業書をつくる」、③「質疑・話し合い」でした。感想を多くの方が書いて下さいました。感想文を読んで、今回もあらためてこの会をやってよかったなあとしみじみ感じています。感想を通して、会の意義が自分でも再認識といたしますか、あらためて分かったように思います。感想の一部（紙面の都合でカットしたものもあります。）を紹介して、この研究会を紹介したいと思います。

### 感想から

「あらゆるものを組織する」という視点で合点がいきました。なるほどなあ。授業書は内容を組織する」ぜんぜん意識していなかったことです。「目的に合わせて組織する」というのを人だけにとらえていましたが、もっと原理的に大規模に動いていたのが、目から鱗が落ちるような感じでした。今後お聞きしてみたいのは、「評価をどのようにしていたのか」です。火曜研究会で授業記録がでたときに、どのような方法で評価したのか。ちょっと調べると初期の頃の『仮説実験授業研究』を見ると感想、テストの結果のようで、〈たのしさの5段階評価〉は見当たりません。このような評価方法はしばらくして出てくるのですが、理解度ではなく、たのしさを選んで表基準にしていたのか、どうしてそうなったのかがお聞きしてみたいです。（佐藤重範さん）

考える意味・意義がある問題、問いがあれば、教師が風邪をひいて声が出なくても、子どもたちで授業を進めていくことがあったというお話はそうだなと思いました。何か、教師の側でこうあるべきだ、こういうグループをつくるべきだというトップダウンの指示は、板倉さんや仮説の教師のみなさんはしたことがないというのは私にとっては、非常に参考になるお話でした。また、教師は媒介者なのだというお考えも同感できるとともに、非常に参考になりました。（吉岡有文さん）

今回も、平林先生ならではのお話を聞くことができありがたいと思いました。私は、授業書の作り方できかたについてはたいへん興味深かったです。むしろ質問される方の話の方が難しいので悩みました。でも、仮説実験授業研究会でない方の質問が、新鮮でもありました。（荒居浩明さん）

今日の話は、僕が幼少期の頃の話なんですね。ビックリです。これから、仮説実験授業研究会として、仮説実験授業とその思想、理論などをどのように伝えていくか？その問題にかかってくることなのかなと思いました。丁度、仮説社のメールマガジンにあったように、風化、忘れると言う事は、ある意味、だいじなことならば、何をどのようにしたら、根幹の部分を残してゆけるか？津波に対する「てんでんこ」のようなものは、仮説実験授業研究会と仮説実験授業にとっては、何か？これを考えて本や論文、レポートにしたいですね。退職後の、これからの空いた時間に、僕にも、何か出来ればなあと思いました。

また聞きたいです。平林さんの当時のメモなどを見ながら、聞きたいです。形にして残たいと思いました。これも、これからの引き継ぎの一つなのでは？（加藤浩幸さん）

とても良い会でした。〈民主主義とヒューマニズムが原理〉というのがとても心に残りました。舟橋さんから、「子どもの評価が基本という考えは広がっていない」とありまし

だが、世界でもまだ教育がとことんヒューマニズムになってないということかと思ひながら聞いていました。（何となくヒューマニズム）授業が成功したかどうかということ子ども感想で決めるというのは、とことんヒューマニズムで、すごいことなんだと思いました。どこかの誰かがその授業を良いか悪いかを決めるのではなく、授業を受けた子どもたちの感想が決めるというのが、仮説実験授業の民主主義というかヒューマニズムなんだと思いました。仮説実験授業のできた頃の板倉さんの思いが伝わってきた気がします。平林先生の話が聞けて、本当によかったです。資料にまとめておきたいと思います。（亀川純子さん）

今日の平林先生のお話は、当時の生き証人としての実感が滲み出ており、ジュワーツと深くしみわたってくるようなお話で、大変貴重なお話でした。私は1983年（『たのしい授業』創刊の年）に小学校教師になり、昨年度退職して再度大学生をしている身ですが、1965年ころは4歳くらいの頃ですので時代が違ってよく分かりませんが、仮説実験授業の草創期の熱意や雰囲気伝わってきました。板倉聖宣先生の研究者・組織者としてのすごさや、庄司和晃先生の実践者としてのすごさなどについても改めて感じ入りました。

（田中浩寿さん）

今回の講演会で「火曜研究会」のことがわかりました。外から見ている時より細かい部分が伝わってきてよかったです。「授業書を作るようにする」ということを目指していたとは予想外でした。でも、火曜研に参加していた人だから可能だったのでしょうか。2000年のはじめ頃だったのでしょうか？（はっきりしないのですが）板倉さんの方針が変わり「授業書は誰でも作るものではない」とおっしゃっていたことが印象に残っています。講演を聴きながら板倉さんのことを思い出しました。

（岩本美枝さん）

私の関心は、板倉さんが目指したことは何なのか？日本の革命だという仮説があったので、平林さんのレジュメで、「全力を投入して日本の教育を変えていくという姿勢で」「科学教育をてこにして」という言葉を読んだ時、私の予想を証明する言葉だと直感して「ゾクゾク」としたのです。政治活動でない手段で日本の革命を行うには国民の教育しかないということで、遠大な構想をスタートさせた。それが火曜研究会。こんな構想を持っているのは板倉さんだけだから、板倉さんたった一人からの革命運動のスタート。ただ、そこに集う人々は板倉さんの意図をどの程度まで理解して参加していたかというところがある。これはいい悪いかは関係なく、当然のことだと思います。昨日の平林さんの話でそれがわかりました。平林さんのように庄司さんの授業に衝撃を受けて参加されたように自分の授業をなんとかしようと思って参加した方がほとんどではないかと思ひます。運動自体も今までの運動とは違って強制的ではなく人々の自発的意思によってしか進めることができないものなので、時間がかかる。「民主的ということは楽しいということだ」ということに確信を持たせたことが、『たのしい授業』の創刊につながっている。「民主主義の旗を高くかかげよう」から「たのしいの旗を高くかかげよう」への進化だったのだと思います。民主的＝たのしい。だから運動の進め方もたのしくなければならない。「組織化」という硬いよくわからない言葉も「輪を広げる」という言葉に変えていけばより楽しくなる。

（池上隆治さん）

（池上隆治さん）

この研究会について、みなさんの期待がとても強いこともわかりました。みなさんの意見をふまえて、今後の会についても検討していきたいです。平林さん、参加されたみなさま、本当にありがとうございました。

#### お知らせ

今年は日本科学史学会年会はオンラインです。シンポジウム「仮説実験授業はどのようにつくられたか」を平林さんを中心に行います。5月22日（土）か23日（日）。決まったら『ニュース』等で連絡します。安価で参加できると思ひます。要事前予約。